

「すべてはどのように終わるのか」

クリス・インピー(著)、小野木明恵(訳)

早川書房 2011年1月25日刊

本書は、なにかと騒がしく不確実性に満ちた現実社会から少し距離をおいて、異次元の議論から、この世界を見つめなおすには最適の一冊である。

本書は、まず人間の死から始め、人類の未来がどのような環境にさらされるか、さらに地球上の生命体が直面する脅威について考察を加える。次いで太陽系に生きることの意味を問い、太陽の終焉について科学的な予測を提示する。さらに太陽系を含む銀河系の最後、そして究極的には全宇宙の終わり方について、現在まで解明されている理論を紹介する。しかし、過去30年間に、物理学者は多くの理論や観察事実を発見してきたが、宇宙全体の形成メカニズムを理解するにはまだ多くの不明な点がある。

その中で、著者は「この宇宙が注目に値するのは、宇宙という構造における自身の存在について考えることのできる(少なくとも)一種類の生物を生み出したからである」と述べている。確かに、この宇宙の誕生から終焉まで、そしてその終焉の先に何があるのかということを究明することは人類の究極の課題だろう。

その過程では、太陽系の寿命や地球の環境の変化、生物の進化などが初めて総合的に説明がつくようになるだろう。いずれこの地球から生命体が消滅することが明らかになったとしても、人類はその事実に狼狽するのではなく、現在の恵まれた環境を生かして、その恩恵を最大に享受するように、環境問題やエネルギー利用に取り組むようになるのではないだろうか。

著者は、コペルニクスの「平凡原理」、すなわち、人間や地球は宇宙の中で特別な存在ではないという考え方を支持している。それに対して、人間や地球は特別な存在であるという「人間原理」が思想界や宗教界では広範に支持されているが、それは原因と結果を逆転させた議論であると一蹴している。

人類の行く末を配慮し、その幸せを最大化したいと政治家が考えるのであれば、このような基礎研究への支援を惜しむべきでなく、むしろ予算を最大限に確保すべきであろう。